

毎日歌壇

米川千嘉子 選

エプロンの後ろボタンが留められず遺影の妻に
すがる新益 東京 佐藤 一郎

△評△妻が健在だった頃は、小さなことで
も互いにカバールしあっていたことに気づく
のだから。「すがる」の一語が切ない。

割引のシールだらけのカゴの中知ってる人に
見られたくない 大阪市 吉田エミ子

△評△割引や値引きを利用する買い物の歌
がにわかに増えている。リアルな心持だ。

ジュリエットが顔出しさうなバルコニー 連なり
干さるるタマネギの房 新潟市 斎藤 斌

法事終え息子は明日から旅行とぞ若さはま
ぶし未来へすすむ 大阪市 鈴木 雅子

女の孫のバレエ発表会に「ブラーボ」を頼ま
れ連呼す最後部席 横浜市 大建雄志郎

セザンヌを眺める帰りのスーパードリンコが
見せるいびつな顔を 川崎市 大平真理子

不妊検査受けに行く朝食ブドウ種あり種な
し等しく甘し 東海市 中山あゆみ

洗い終え竿にはためく町衆法被若き日祖父も
父も着たもの 村上市 杉江 正子

わが町の宮の祭りに本年も御輿をかつぐ子い
なくて出せず 吹田市 鈴木 基充

夏の野を旅愁帯びたる雲流る古里にいて父母
を偲べは 京丹後市 縄手 隆雄

加藤 治郎 選

熊蜂の鳴き声のない昼過ぎに命について議論
している 生駒市 宮田 修

△評△昼前は元氣よく鳴いていたのだろ
う。生を実感したのだ。昼過ぎに鳴き声は
途絶えた。命の移ろいを語ったのだろう。

つるりてんトマトの種が掴めない こういう
ことか「夢」というのは 狭山市 りんか

△評△夢の感触を歌った。楽しいオノマト
ペである。ツ・テ・トの音が心地よい。

永遠は誓えないからサイダーの泡が消えたら
私は行くね 四万十市 佐竹 紫円

新宿は着いたとたんに放たれて山手線の席は
灰色 東京 石井 しい

雨間の柔いころはかの月のように欠けたり
満ちたりしながら 新座市 睦月くらげ

汝が我が贈ってくれた歌の数々をいまあたし
は抱き締めている 直方市 大石 聡美

炎天のカザとメールでつながれど水も小麦も
送るよしなし 横浜市 山本 夕焼

缶蹴りの公式缶に選ばれた五年男子のブラッ
クコーヒー 大津市 世田 夏雪

誤解だと言いつくはせず受け入れてレアに焼か
れたステーキを切る 愛媛 川村 栄

夏休みキラキラ光る学校の子どもが消えたプ
ールの孤独 仙台市 梅津シゲル

水原 紫苑 選

七色の一束にまとまつてゐる虹を色づつは
ぐしゆく 甲府市 村田 一広

△評△一束にまとまつている方が幸せかも
しれない虹を、色づつにほぐそうと言っ
るのは人間のやさしさか、残酷さか。

ひんやりと横たえられた葡萄からひかりの粒
を彫り出して食む 大野城市 野分 のわ

△評△植物のブドウの実ではなく、ひかり
の粒こそが実体だという、認識の新鮮さ。

あらゆる指に時間の蔓を巻きつかせ神のさら
ってゆく稲光 加古川市 石村 まい

ゼンマイで動く仕掛けの物もあり銀河を侮っ
てはいけません 枚方市 久保 哲也

人がもしたったひとりのこの世界アダムは神
と永遠を生きしか 加古川市 畑 啓之

従容と死に就くことの難きゆゑ水に浮きつつ
半眼のオフエーリア 名古屋市 浅井 克宏

感情を手放す 名古屋市 よだか

全宇宙あらゆる式があるらしい私はあしたな
にをしている 倉敷市 中路 修平

あのひととはひだりへと 水たまりには紅葉ひ
とひら秋へゆく舟 高島市 くらたか湖春

風景が際立つ時間郵便車やって来る他動く物
無し 柏原市 類家 有二

伊藤 一彦 選

父戦死の意味も知らない幼児が老婆になれ
た日々感謝す 岡山市 久山 順子

△評△周囲の人が父親の戦死を語っていた
が、「センシ」とは何かも分からなかった幼
児だった作者。戦中戦後を改めて振り返る。

着地する地点を探して漂える妻のはなしをじ
っと励ます 名古屋市 田中 靖人

△評△結句がさすがである。話の長くなつて
いる妻を温かく「励ます」というのだから。

吾に添うネコのやさしきぐるぐる何でもな
いさと言われておりぬ 福岡 中村まゆみ

あをむしが真夜に葉つばをちきちきと食むを
愛でる君に内緒で 横浜市 谷口 菜月

雨上がり虹が掛ければ子どもらの歓声どこか
讚美歌めいて 兵庫 廣澤 真希

東北や北海道のクマ怖いけど人間は一層怖い
神戸市 前田 達生

この猛暑ヒトから人になったから進化はむし
る弊害だらけ 塩釜市 高橋 永喜

庭隅に茗荷見つけたその脇に飛翔間近の蟬
の羽根光る 富田林市 小林 元子

そうめんは帯をほどくと湯に浸かり真っ直ぐ
を止めくつろぎだして 福津市 原田 冬

もらったら返さなければならなくてももうも
らない君のやさしさ 川崎市 奥村 真帆

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから
投稿できます